

河北潟湖沼研究所通信

Vol.6 No.4

第16回河北潟自然観察会開催される - マガンの群れを観察、宇ノ気川と東部承水路も調査 -



宇ノ気川に流出した重油の回収状況について確認（オイルフェンスの張られた河口付近）

第16回河北潟自然観察会がさる2月4日（日）に開催されました。薄曇りの程良い日の光に恵まれ野鳥観察には絶好の天候でした。干拓地内にはまだ雪が残り、雪の上を歩くキジの姿が目立ちました。また、観察中にマガン約200羽の群れが、南の方よりやってきて、河北潟の東方の水田に降り立ちました。

観察会の中で、さる1月21日に明らかとなった宇ノ気川への重油流出の影響と東部承水路での重油の回収状況について確認するために、宇ノ気川河口付近と東部承水路を訪れました。河口には、オイルフェンスが張られていましたが、水面にかすかに油膜ある程度で重油の塊はありませんでした。東部承水路にも、重油はほとんど確認されませんでした。丁寧に回収作業がお

こなわれたことにより、ほとんどの重油は回収されたようでした。水辺ではヘラブナ釣りをしている人もみられ、いつもの河北潟の風景が戻りつつありました。

なお、今回の重油流出への対応において「分散剤」を使用するなどのいくつかの不適切な対策がみられました。このことは今後への教訓とする必要があります（関連記事2頁）。また自然観察会の中で、ハマシギと思われる油まみれの野鳥の死体が見つかりました。小規模ながら野鳥への被害もあったようです。河北潟湖沼研究所では、重油流出のような事故に対しての地域における対応についての研究や、今回の重油流出の野生生物への影響の正確な把握をおこなっていきたくと考えています。

宇ノ気川重油流出に関して

沢野伸浩(星稜女子短期大学・河北潟湖沼研究所理事)

最初

1月21日に宇ノ気で「発生」した重油流出事故の第1報を受けたのは、その日の午後7時頃だったと記憶している。知り合いの地元紙の記者から「宇ノ気の鑄造工場の燃料タンクからB重油が流出し、宇ノ気川に流れ込んだらしい」という連絡を受けた。普通ならすぐにも現場に駆けつけて状況を確認めるところだが、ちょうどその1週間前から降り続いた大雪は、特に河北郡を「直撃」したような格好で、そのとき自宅の庭にも1mを超える積雪があり、現場はさらなる雪の中だった。

しかし、出かけようか家に留まろうかジリジリとしていると、再度同じ記者から電話がかかり、いくつか状況を教えてもらうことができた。今回の油流出が1月の上旬から非常に緩慢な形で続いてきたこと(しかし、これは後から否定される)流出したのは「B重油」約5KLであることなどである。

当日の取材と翌朝の新聞報道

やはり雪のため連絡を受けた21日の夜に現場に出かけることは諦め、翌朝現場に行くための準備をしていると三度目の電話が同じ記者からかかり、そのまま電話取材となった。まず、日本では「B重油」は既にほとんど存在しないこと、従って、流出した「重油」は「A重油」か「C重油」のどちらかであることを伝えた。また、A重油の場合C重油と比較すると揮発成分を多く含むため、ほんのわずかな量であっても独特の臭気が強く漂い、ちょっとその臭いをかいただけでも頭が痛くなったり、気持ちが悪くなったりする。そのような人が多くいるわけでもないため、流出したのはC重油である可能性が高いと伝えた(後から実際主として流出したのは抜きオイル等から作られる「再生燃料」であることが分かった)。

また、このとき、今回の油流出の対応措置として「中和剤」を油を流出させたパイプから川に流した、という話を聞いた。この話を聞き、流



1月22日午前8時40分撮影：流出源の重油タンク、報道各社が集まっていた。

出した油を中和できる薬剤など最初から存在しないこと、「中和剤」とは廃棄物処理法などでは「油処理剤」とされ、その作用からは「分散剤」と呼ぶべきものであること、川や湖に流出した油が流れ込む可能性がある場合、その使用が考慮されること自体がもはや「非常識」の範疇に入ることなどを伝えた。この結果、翌朝の新聞報道は新聞社によって2つに分かれるものになった。

私を取材した新聞記事は、「中和剤」の使用についてその異を唱える記事を私の談話として掲載した。他の新聞は一応に、「油流出にあっては中和剤の使用が当然」という、対応担当者の発表をそのまま鵜呑みにしたような記事が掲載されていた。

「中和剤」

英語では「dispersant」と呼ぶ。油で汚れた皿を洗う時の台所洗剤と同じく、合成界面活性剤を主成分とする。しかし、通常これだけでは流出した油を「処理」することはできないので、石油と同じ有機溶媒も添加される。つまり、「中和剤」の本来の作用は、流出した油を溶媒で「溶かし」それを合成洗剤を使って「分散」させているに過ぎない。これは、油を「塊」の状態を保持するよりは、微粒子状にした方が微生物や太陽光線による分解がより促進されやすい、と

いう原理に基づくものである。が、これには2つの条件がある。まず本当に流した油を微粒子状にできるのか、また、微粒子になった油が十分広い範囲に拡散するか、という2点である。まず、前者の条件は、上にも書いたとおり、日本のほとんどの「中和剤」はB重油対応であり、それ以外の油には不向きである。次に拡散するかであるが、通常分散剤は散布後船のスクリー等での十分な攪拌が必須とされ、十分な拡散の範囲を確保するために2 m以上の水深が必要で、それ以下では海でも使うべきではないとされている。河北潟の平均水深は比較的水深の深い調整池部分も含めて約2.5 m、直接油が流入した部分の宇ノ気川に至っては50cmにも満たない。そこでどうやってスクリーを回すのか...

顛末

紙面の都合で話を中抜きにする。事故が発生してから10日ほど経ってから宇ノ気消防署に呼ばれ、回収作業が行われている現場を船で案内された。その時点では「未発表」という詳しい話を聞くことができた。要約すれば、流出は流出を起こしたタンクの油の補給状況、工場内の油の使用量等から逆算すると1月18日から流出した可能性が極めて高いという。

今回の油流出で最も懸念されたのは流出した油が東部承水路に流入し、それが河北潟干拓地内や周辺農地へ農業用水としてポンプ場から「供給」されてしまうことだった。しかし、上に書いたとおり、ちょうど今年は近年希に見る短時間に大きな降雪があり、それが河北潟の水面に積もり（雪泥）自然のオイルフェンスとなって、東部承水路の上流部のわずかな部分を除き、流出油の下流への拡散を食い止めた。この自然現象が被害を最小限に止める結果となった。

教訓

油流出といえば4年前に起こったナホトカ号事故を忘れた石川県人はいないだろう。今回の事故に遭遇し、教訓を残すということがまさに「言うは易、行うは難」であるかを思い知らされた。もし「中和剤」の使用が「流出事故解決の切り札」となり得るものであれば、なぜナホト



1月22日午前9時20分撮影：発生源から1 km下流の宇ノ気川。川の両側に油膜が見られ、重油臭が強く漂う。

カ号の時にあのような苦勞して、5人の死者まで出した人力による回収作業が必要とされたのか。こんな単純なことが関係者の間に理解されないままになっている事実。

ナホトカ号以後、執拗にこの問題に取り組んできた。アメリカ、韓国、ヨーロッパと様々な国を回ってその国の油流出事故対応の体制を実際にこの目で見る事ができた。既に日本の対策は韓国の10年遅れ、アメリカ・カナダとは「周回遅れ」どころか、相手がどこにいるのか検討もつかないほどの差が存在する。

「専門家データベース」を

だいたいどのような災害も「想定外」にやってくる。今回の事故対応で確かに行政側の対応のまずさがあったことはいくつかの点で否定できない。しかし単に「まずい」と言っているだけでは何の進歩もない。諸外国の体制の差としてまず感じるのは、日本に「専門家データベース」が存在しないことである。今回のような事故が発生した場合、対応担当者にまず「相談できる先」があれば、分散剤を「中和剤」と誤って認識して使用するようなことはなかっただろう。また、オイルフェンスや油吸着剤の使用も、もっと効率的な使い方ができたはずである。このような「相談できる先」をせっかく日本は大枚を叩いて「IT立国」になるのだから、インターネットでも使って早急に整備を進めるべきである。

最近の活動

津幡町住民が自然農園にビオトープ造成

現在、津幡町津幡の谷地で休耕田や水田を利用して米作りや果樹園を体験できるよう、市民の手で整備が進められています。「つばたすこやかの森」と名付けられたこの土地の一角を利用してビオトープ(野生生物の生息空間)池をつくろうと、さる3月18日に造成工事が始まりました。

ビオトープ造成の計画には、河北潟湖沼研究所生物委員会の白井伸和研究員と高橋久研究員が加わり、池の形状や植栽する植物の選定などのアドバイスをおこなっています。4月8日には、池の整備とともに植栽を実施する予定です。この作業には興味のある方なら、どなたでも参加いただけます。詳しくは河北潟湖沼研究所金沢事務局(076-261-6951)までお問い合わせ下さい。



「つばたすこやかの森」の造成が予定される谷地

大串研究会会長 - アメリカシロヒトリの捕殺方法を提言

河北潟湖沼研究所理事で、同研究会会長の大串龍一金沢大学名誉教授は、金沢市のアメリカシロヒトリなどの防除方法を検討する諮問機関「街路樹等害虫防除の安全性に関する研究会」の会長を務めていますが、このたび、従来の農薬散布から直接害虫を取り除く捕殺方式に転換する報告書を提出しました。

金沢市はこれを受けて、捕殺に必要な諸経費について新年度予算に盛り込む方針で、さらに新しいシステムを市民に普及するために広報活動を展開するとしています。これまで農薬の散布による市民と生態系への二次的な被害が懸念されていただけに、画期的な方向転換であると考えられます。

河北潟湖沼研究所ホームページのアクセスが増加

河北潟湖沼研究所金沢事務局が管理するホームページ「チュウヒのふるさとかほくがた」が、昨年1月31日に開設されて以来、約1年間で5000件以上のアクセス数を記録しました。最近では、このホームページの記事を見た方からの問い合わせも増えています。

現在、ホームページ上では、河北潟や周辺の問題に関するニュースや環境保護活動を紹介する、「新着情報」のコーナーの他、身近な自然環境やビオトープづくりを紹介する「ビオトープの部屋」、河北潟と周辺の現況を伝える「河北潟モニタリング」、河北潟の生物相を紹介する「河北潟博物館」のコーナーなどが展開されています。まだ、このホームページをご覧になっていない方は是非一度アクセスしてください。ホームページのアドレスは<http://kahoku.soc.or.jp>です。また、河北潟湖沼研究所では、本部の管理するホームページ(<http://sawano.seiryu.ac.jp/lake/sympo99/np0.htm>)もあります。こちらでは「河北潟共和国」の取り組みなどを紹介しています。あわせてよろしく願いいたします。

河北潟湖沼研究所通信 VOL.6 NO.4

2001年3月20日発行

発行所 河北潟湖沼研究所友の会

〒920-0051 金沢市二口町八58

河北潟湖沼研究所金沢事務局内

TEL:076-261-6951 FAX:076-265-3435